

I はじめに

Ⅱ 「子どもが読みを開く授業」とはⅡ

子どもが一つの文学作品を読む。最初一読した段階で、何かの感想を持つだろう。「おもしろいなあ」「かわいそうな話だな。」などと素朴な感想を持つ。そして、意味調べをしたり、粗筋をとったり、一文ずついねいに読み進めて映像化(イメージ化)していくことで、最初に「いいなあ」「かわいそうだなあ」などとぼんやり感じていたことが具体的な読みとつながって見えてくる。最初は「どういうことなんだろう」とわからなかったことも自分なりに「こうではないか」と自分の読みを持てるようになる。そして、そうした一人一人の読みとりをみんなできあわせてみることによって、一層読みが明確になったり、逆に、問題点が鮮明になってきたりする。いわゆる「課題」がうきぼりにされてくる。更にその課題を追求していくなかで、その作品の深い世界が見えてくる。こうした読みを開いていく過程を子どもが主体となって切り開いていくような授業を創りたい、という願いをこめて「子どもが読みを開く授業をめざして」とレポートのテーマに掲げたわけである。

Ⅱ 学習の全体構想

① 個人学習 (一人読み)

- ・音読練習
- ・全文視写
- ・意味調べ
- ・書き込み(行間に自分の読み・疑問などを書いていく)

② 交流学习 (一人ひとりの読みを出し合いながら、読みを共有したり、読みの違いを明確にしていく)

③ 課題追求学習 (交流学习の中でうきぼりにされた課題をみんなで追求する。)

④ まとめの学習 (作品全体を読み通してのまとめの感想を書く)

なお、この全体構想にこめた私の願いを補足すれば、「重要なことは、いかに授業の中で深い読み取りがうまれたか、ではなく、一人一人がどれだけ自分の読みを開くことができたか。」ということである。みんなが話し合うのも結局は一人一人の読みをより拡大深化させるためにやるのである。つまり、「個人学習」の思想を学習全体に貫こうというのが私の願いなのである。

Ⅲ 学習の実際

1 個人学習

① 音読練習

「一つの花」は、9月初めの教材である。しかし、運動会の練習であわただしい毎日が続くことを見越して、運動会後に取り組むことにし、それまでの間にどの子も音読はできるように家庭学習等で練習を続けさせた。私のクラスには、まだたどたどしい音読しかできない子が3人残っている。その子たちは、朝の始業前の時間を使って継続的に聞いてやった。

作品との出会いを大事にするという考えからは、こうした、いきなり音読練習という形での出会いは、あまりにもぶつきらぼうであるかもしれない。しかし、今の私の学級で言えば、確実にどの子も音読できる力をつけた上で、学習に入ることの方がより重要だと思ったからである。また、音読練習をうんとやったから作品との新鮮な出会いがなくなるとも思えないからである。

② 全文視写について

全文視写も、1時間書き方の指導をして、後は家庭学習や、細切れの時間を利用してやらせた。ノートを縦見開きにして、上のページに一行おきに視写、下のページは、自由な書き込み欄とした。全文視写をやらせる意図は直接的には、個人学習の作業を進めるためのノート作りということである。もう一つの意図は、音読のようにスラスラ読み流している時には見えなかった細かな表現に気付かせるということがある。つまり書くことによって読むということがある。しかし、これは、かなり高級な要求であり、全員に求めることではないだろう。4年生の子どもたちにとっては、むしろ、書き上げていくことそれ自体に単純だが快感を感じていた。それでいいのだと思う。視写する行為自体が特に国語の力の弱い子にとっては大切な「学習」になっていると思うからである。

③ 意味調べ

視写ノートの行間を利用して、わからない言葉の意味を、その言葉の横に直接書き込ませていった。「意味調べ一覧表」を作るより実際的だと思ったからである。

④ 書き込み

①～③までの仕事を済ませた上で、運動会終了後の9月下旬から本格的に「一つの花」の学習に入っていた。その最初が「書き込み読み」である。私の学級では、すでに、いくつかの教材で、この書き込み読みを経験しているので、「どの程度自力で読む力が育っているのだろう」と確かめてみたい気持ちもあり、「とにかく、自由に書き込みしてみなさい」ということで、1時間やらせてみた。その結果は、次のようであった。

今現在の一人読み能力の状況

①物語の展開の核になる部分が見え、主人公の心情を文の細かな叙述にも鋭く目を向けて、自分の読みが書き込める。また、文の前後の関係をきちんとつなげて読み取れる。

(有香・なつ希・宏・美由紀・明代・由美子・祐子・和幸・智将・朝子・邦臣)

②文に即して登場人物の気持ちは読み取り、書き込むことはできるが、一般的で、前後のつながりがあまりつかめず、部分で読む

(紗織・政義・公美・衣利子・龍法・哲也・宣彦・優子・智昭)

③書くことはできるが恣意的な自分の思いつきを書き連ねるだけ(自力で書く力も弱い)

(勝仁・悟司)

なんてかわいそうな子でしょうね……自分の口ぐせをゆみこがおぼえたんだから、自分のせきに

んやのに

この子は、一生みんなちようだい……お母さんが悪いといったらいいのと思う。(悟司)

山ほどちようだいと言って

「一つだけ、一つだけ」……ゆいたいからいった。(勝仁)

④人物の気持ちに触れる力はあるが、自力で書き進める力がよわい

(直也・大裕)

おやつどころではありませんでした。……そんなにはげしかったのか(直也)

じゃあね、一つだけよ。……やさしいおかあさんだなあ。(直也)

などと、初めの部分は書き込んでいるが、あとは、白紙。直也は、授業中すでにストップしてしまっていた。

⑤まだ、文に即して登場人物の気持ちを読み取り、書くということが、自力ではできない。

(洋志) ……辞書の意味を調べて書くことだけではできている。

こうした学級の子どもたちの現状を見て、まだまだ個人学習に対するていねいな指導があるのでなあと反省させられた。

また、全体として、物語の中の登場人物に寄り添っていくような読みでなく、外から眺めているような読みになってしまった背景には、書き込みをさせるときに、「どんなことを書いてもいい、そこを読んで自分の感じたこと、感想でもいい」と言ったからであるような気がする。それが、恣意的な読みをさせてしまうことにつながった原因の一つでもある。

やはり、書き込みの方向として、「登場人物の心情により沿い、共感させていくような読み」をさせねばならない。そう考えて、次のような「書き込みのしかた」のプリントを配り、それに沿ってやらせてみた。

書き込みのしかた

「登場人物のしたこと、言った言葉に注意しながら読んでいきましょう。

登場人物のしたこと、言ったことが書いてある文がでてきたら、そこで

一度たちどまりなさい。そして

「どうして、こんなことをするんだろう」

「なぜ、こんなふうに言うのだろう」と、考えてみましょう。

「きっとこんな気持ちでしたんだろう、こんな気持ちで言ったのだろう」

と自分で考えたことを書きこみなさい。

「なぜ、こんなことをするのかよくわからない。」

「なぜこんなことを言うのか、わからない。」というところは、

『なぜ……したのだろう。』とぎもんに思うことを書きなさい。

9月・日(第2校時)

・まず、登場人物のしたこと、言ったことが書いてある文に線を引かせた。(私が文を読み、子どもたちに見つけさせていく、という形で。)

その後、書き込みをさせていった。自力ではできない哲也・洋志・勝仁の他大裕・紗織の5人は、前で、私と一緒にやっていくことにした。

そして、一応全員が自力で書き込みを済ませたところで、全員の読みを一覧表のプリントにして、友達の読みを参考にしながら、まだ、読み落としていた部分、あいまいだった部分についてまた書き込ませていった。

子どもたちの書き込み例(抜粋)

「なんてかわいそうな子でしょうね。一つだけちようだいと言えば、なんでももらえると想ってるのね。」

あるとき、お母さんが言いました。

・なぜこんなことを言ったのだろう(朝子)

・いっぱいもらえることを知らない(有香)

・一つだけと言えばもらえらると思ってるのがかわいそう。(美由紀)

・いつもいつもあまやかしていたからお母さんたちは、こうかいしている。(智昭)

・お母さんもゆみ子にあげてばかりはいやになった。自分も食べたいのに毎日あげているから

(由美子)

すると、お父さんが、深いため息をついて言いました。

- ・大人になったらどんな人にそだつか心配（美由紀）
- ・お父さんはゆみ子のことをとでも心配しているんだな。（明代）
- ・ゆみ子が「一つだけちようだい」としかいわないのが、さんねんでかなしくなった。（祐子）
- ・何か不安なことがあるみたい。（朝子）

「この子は、一生、みんなちようだい、山ほどこちようだいと言って、両手を出すことを知らずにごすかもしれないね。」

- ・いつも一つだけ一つだけといっているから、一生一つだけちようだいといってすごさだろうとさんねんに思った（祐子）

一つだけのいも、一つだけのにぎり飯、一つだけのかぼちゃのにつけ——。みんな一つだけ。一つだけのよろこびさ。いや、よろこびなんて一つだつてもらえないかもしれないんだね。いったい、大きくなって、どんな子に育つだろう。」

- ・こんなさんねんなゆみ子のすがたを見て、これからさきのが心配になった。（祐子）
- ・お父さんは、子どもの大きくなってからのことをあきらめているみたい。（なつ希）
- ・ゆみ子のことを心配しているからどうしようと思っっている。（邦臣）

そんなとき、お父さんは、きまつてゆみ子をめちやくちやに高い高いするのですた。

- ・なんだか、悲しいからお父さんも気分がよくなるようにやっている。
- ・悲しみをふきとばす。（有香・美由紀）
- ・悲しいのをこらえているような気がした（明代）
- ・お父さんのつらさをゆみ子にわらわせているみたい。（なつ希）
- ・ゆみこがかわいそうだと思っっている（朝子）
- ・ゆみこがにくたらしい（邦臣）
- ・もうお父さんは、兵隊になって死ぬかもしれないから、死ぬ前に遊ばせた。（和樹）

それから間もなく、あまりじょうぶでないゆみ子のお父さんも、戦争に行かなければならない日がやってきました。

- ・じょうぶでなくてもいかなければならない。もうもどれないかもしれない（祐子）
- ・むりやりつれていかれるような気がする。（有香・智将）
- ・なぜ行かなければならないのだろう。
- ・だんだん負けていって、人が足りないから、病気でもいかなければならない。（美由紀）

ゆみ子は、おにぎりが入っているのをちやあんと知っていましたので「一つだけちようだい、おじぎり、一つだけちようだい。」

と言って、駅に着くまでにみんな食べてしまいました。

- ・いつもいつもろくにたべていないから一つ食べたなら、もつとたべたくなくて、いつのまにかたいらげてしまった（祐子）
- ・食いしんぼ。赤ちゃんだからしかたない。
- ・よほどおなががすいているんだな。（大裕）

お母さんは、戦争に行くお父さんに、ゆみ子のなき顔を見せたくなかったのでしょうか。

- ・お母さんは、お父さんを少しでも悲しませたくないから気をつかったと思う。（和幸）

- ・お母さんがお父さんに大して最後のやさしさのような気がする。(明代)
- ・戦争へ行ってがんばるお父さんをはげますためだと思う(朝子)

ゆみ子とお母さんのほかに見送りのないお父さんは、プラットホームのはしの方で、ゆみ子をだいで、そんなばんざいや軍歌の声に合わせて、小さくばんざいをしていたり、歌を歌っていたりしていました。まるで、戦争になんか行く人ではないかのように。

- ・すこしさみしそうに楽しくしているよう。(祐子)
- ・自分たちもいわっているように見せている。本当は、家族としてはとっても悲しいことだからかもしれないな。(有香)
- ・さみしさを小さなばんざいにかえていたみたい。(なつ希)
- ・戦争なんかいきたくないと思っっているようだ。(朝子)
- ・ゆみ子のお父さんは、軍歌を歌ったりばんざいをする気になれない。(明代)
- ・お父さんははずかしかったのかもしれない。(由美子)
- ・ゆみ子とこんど会えないかもしれないから、元気にしている。(智昭)
- ・他の人が見送りに来ないから

ところが、いよいよ汽車が入ってくるというときになって、またゆみ子の「一つだけちようだい。」が始まったのです。

「みんなおやりよ、母さん。おにぎりを。」
お父さんが言いました。

- ・お父さんもゆみ子のなき顔を見たくなかった。(祐子・有香・なつ希・和幸)
- ・ゆみこにないてみおくってもらいより、わらってみおくってほしいから。
- ・さいごまでにこにこしてほしいんだろう。(大裕)

「ええ、もう食べちゃったんですの。ゆみちゃん、いいわねえ。お父ちゃん、兵隊ちゃんになるんだつて。ばんざいって。」

- ・話をかえてあやしている。(有香)

お母さんは、そう言ってゆみ子をあやしましたが、ゆみ子はとうとうなきだしてしまいました。
「一つだけ。一つだけ。」
と言って。

- ・あやしていたけれど、とうとうなきだしてしまった。(有香)
- ・お父さんが戦争に行くことを知っていて、お父さんをとめようと思ったのじゃないかな(明代)
- ・なんだかお父さんが悲しくなるような言葉(なつ希)

お母さんが、ゆみ子をいっしょうけんめいあやしているうちに、お父さんが、ぶいといなくなってしまうました。

- ・知らない間に。さみしく(有香)
- ・こんなに泣いているのでかわいそうなようにぶいといなくなった。(なつ希)

お父さんは、プラットホームのはしつぼの、ごみすて場のような所に、わすれられたようにさいいていたコスモスの花を見つけたのです。

- ・ゆみ子のすきな一輪
- ・ゆみこのように一人で一つだけちようだいのようにさいっている。(なつ希)

- ・ 一つだけさいていた。(由美子)
- ・ 戦争などでいろいろな花がなくなっていたときにまだのこっていたよう。(朝子)

あわてて帰ってきたお父さんの手には、一輪のコスモモスの花がありました。

- ・ はやくわたしたい。(由美子)
- ・ ゆみ子がまたなきだしたらあかんからおにぎりのかわりにやろうと思ったから、走って帰った
(和樹)

「ゆみ。さあ一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう——。」

- ・ ゆみ子は一つだけというのがすきだから、お父さんはゆみ子にあげたんだなあ。(有香)
- ・ 一つのよろこびをおしえてくれたみたい。(なつ希)
- ・ お父さんがいないときのお父さんのかわりのよう(朝子)
- ・ さいごのプレゼントだから大事にするんだようと言った。智将)

ゆみ子は、お父さんに花をもらうと、キヤツキヤツと足をばたつかせてよろこびました。

- ・ それだけ、足をばたつかせるくらいうれしいんだなあ。(有香)
- ・ とてもうれしい。おにぎりのことをわすれている。(美由紀)
- ・ 一つの喜びのありがたみがわかった。(なつ希)

お父さんは、それを見てにっこりわらうと、何もいわずに、汽車に乗って行ってしまいました。

- ・ ほっとしてにっこりわらい、そのまま汽車にのってしまった。しゃべると悲しくなる。(有香)
- ・ お父さんもわかってくれてうれしいまま、何もいわずに行った。(なつ希)
- ・ ゆみ子がよろこんでくれてよかったとお父さんは思っていると思う。
- ・ 顔でわらっているけれど、心ではないている。さよならも言わずに行ってさびしいんだろう
(智昭)

ゆみ子のにぎっている一つの花を見つめながら——。

- ・ これを思い出にしてほしい。(有香)
- ・ なんだかさみしいみたい。(なつ希)
- ・ お父さんの心のこもった一つの花だと思って見つめている。(明代)

子どもたちの書き込みをどう分析するか。

3 時間ばかりかけて個人学習(書き込み)を終えた段階で、子どもたちの書き込みをながめてみて、一番驚いたことは、おそらくこの物語の中心的場面であるはずの、別れの場面に子どもの読みの目があまり向けられていないということだった。何人かの子は、書いていたが、それも、きわめて一般的な読みにとどまっていた。

どうして、子どもたちは、ここが目にとまらないのだろうか。ここだけでなく、他の部分についても、子どもたちの読みがどこか頼りなげなのである。どうしてだろうか。

「一つの花」は、作品全体の描き方が非常に淡々としている。たとえば同じ戦争をテーマとした「お母さんの木」や「かわいそうなぞう」のような生々しさを持っていない。それが、あるいは、子どもの読みに作品の世界に直接的に触れられない原因になっているのかもしれない。

また、この作品を読み進める時、だれによりそっていくか、といえ、幼いゆみ子より、むしろお父さんお母さんということになる。大人の感情のひだを4年生がさぐるうとすること自体に無理があるのかもしれない。少なくとも私の学級の子どもたちにとってはむずかしかったであろう。

さらに、あのコスモスの花を手渡す場面は、「コスモスの象徴性」を読み取ることなしに、父の心情に迫ることはできない。しかし、「プラットホームのはしつぽのごみすて場のようなところに、わすれられたようにさいていたコスモスの花」という叙述からその象徴するものを自力で読み取るということなど、無理な注文であったのだと思う。

とにかく、個人学習の段階では、まだ、この作品の表面をさらつとなでているという状況である以上、次の交流学習・課題追求学習の中で、子どもの読みを開いていかなばならない、と思った。

2 交流・追求学習

ここでは、別れの場面でお父さんがゆみ子にコスモスの花を手渡す場面の授業記録をあげることにする。それは、先にも述べた通り、個人学習の段階では、子どもたちのこの場面の読みが表面的なものに終わっていて、それをどこまで開いていけるか、ためしてみた授業だからである。

以下、授業記録に即して、「子どもが読みを開いていく学習になったかどうか。」「授業の中での教師の対応は子どもの読みの学習を援助する形で関わっているか。」などについて分析してみたい。

《教材文》

ところが、いよいよ汽車が入ってくるという時になって、またゆみ子の「一つだけちよ
うだい。」が始まったのです。

「みんなおやりよ、母さん。おにぎりよ。」

お父さんが言いました。

「ええ、もう食べちゃったんですの。」ゆみちゃんいいわねえ。お父ちゃん、兵隊ちゃん
になるんだって。ばんざあいつて。」

お母さんは、そう言つてゆみ子をあやしましたが、ゆみ子は、とうとうなきだしてしま
いました。

「一つだけ。一つだけ。」
と言つて。

お母さんが、ゆみ子をいっしょうけんめいあやしているうちに、お父さんが、ぷいとい
なくなつてしまいました。

お父さんは、プラットホームのはしつぽの、ごみすて場のような所に、わすれられたよ
うにさいていたコスモスの花を見つけたのです。あわてて帰つてきたお父さんの手には、
一輪のコスモスの花がありました。

「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう——。」

ゆみ子は、お父さんに花をもらうと、キャッキャツと足をばたつかせてよろこびました
お父さんは、それを見てにっこりわらうと、何も言わずに、汽車に乗つて行ってしま
いました。ゆみ子のにぎっている、一つの花を見つめながら——。」

【授業記録①】

洋志 朗読「ところが」一つだけ、一つだけ。」と言つて。」

T 洋志、今、どういう時なんかわかる？

今、汽車が（C 来る時）「いよいよ汽車が入ってくる」ということ
は、もう、むこうのほうに汽車が見えているわけね。で、そういう時に、
何がおこったんか。（C 「一つだけちようだい、一つだけちようだい」）

また泣き出したんですね。そういう状況ですね。最後は、笑顔で気持ち
よくわかれたいなあつてお母さんは、おむすびもぜんぶやっちゃった。お
父さんもじつとさいごの時を待っていた。そんな時に、別れる1分か2分
前に、ゆみ子がまた、「一つだけちようだい、」て言った。お母さんはな
んとかなだめようと思つて言うんだけど、ゆみ子は、泣き出してしまった
その時お父さんは、どうしたか、そのところを今日は勉強しますね。

洋志は、音読の力が弱い子だが、二
学期になつてずいぶんなめらかな音
読ができるようになってきたので、
最初の朗読に指名した。

今、どういう状況をきちんとつか
ませることが、みんなで学習する土
台作りという思いで、説明している
できれば、こういう説明なしで、ス
ツと入れるような学習集団に育てて
おきたいところだが、まだ私のクラ

まず、みんなの読みを自由に出してみましょう。

ノートはにおいて、本を見てください。

T 読む。

「お母さんがゆみ子をいっしょうけんめいあやしているうちに、お父さんは、ぶいといなくなってしまうました。お父さんは、プラットホームのはしつぽのごみすて場のような所に、わすれられたようにさいていたコスモスの花を見付けたのです。あわてて帰ってきたお父さんの手には一輪のコスモスの花がありました。」

はい、今先生が読んだところでしたら、どんなことを読み取りますか
全員に手があがるまで待ちましょう。もう一度読んで。

C 読む

T 読めた？はい、ここのお父さん、どんな姿が浮かぶ？どうしてこんなことしたんだろうかな、て自由に出してみて下さい。

衣利子 お父さんは、もう、お父さんはコスモスの花を見つけて、もう汽車が入ってくる時になって「一つだけちようだい。」とゆみ子ガいったので、お父さんがあわてて、さがしに行ったら、ごみすて場のところに、コスモスの花があったので、あわてて帰ってきてゆみ子にコスモスの花をあげようとした。

T あわてて帰ってきたのは、これをゆみ子にあげようと思って。

勝仁 あんな、ゆみ子が泣き出したからな、何かないかさがしにいかなかった
T 泣き出したから、さがしに行つたというのは、何かなきやますものはないかなってさがして、そして、その時にコスモスの花が見つかった。

大裕 泣き出してから、さがしてな、見つかったさかいな、
ゆみ子が泣き出してからぶいといなくなつて、ほてからな、プラットホームのはしつこのほうに行つたら、コスモスの花があったから、ほうつとためいきをついた。

T このコスモスはプラットホームのどこにあったかといつたら、
C ごみすてば

和幸 ごみすて場のような所

T プラットホームのはしつぽのごみすてばのような所にさいていた。

それを見て、何やて。「ほうつ」て思った？

大裕 「助かった」と思った。

T ああ、これを見たお父さんに、「あつ、助かった」と思った。

勝仁 泣きやむと思つた。

紗織 お父さんを忘れんように。

T 何？紗織。

紗織 お父さんは、ゆみ子に、花を上げたのは、お父さんを忘れないように。

T おまえは、このコスモスを「ああ、いいものがあつた。」てわたしに行つたのは、何だつて？お父さんを忘れないように？

紗織 忘れないように。

T はい。そんな気持ちがあるんじゃないか。他に、ここで、こんなこと
読んだ、というの。美由紀さん。

美由紀 私も、お父さんを忘れんように、覚えていてほしいから。

T ほう、お父さんのことを覚えててほしい。…直也

直也 これやつたら泣きやむ。

T もうちよつとここ、聞いてみましょうか。

大裕は、コスモスの花を見て「ああいいものがあつた」て言つたね。

スではこうしたていねいさが必要である。

・ノートをしまわせたのは、ノートの書き込みを読むのではなく、自分の言葉で語らせたかつたからである。その方が、他の子によく伝わる声になる。

・非常に漠然とした問いだが、「子どもの読みから出発したい」という願ひから来ている。

・衣利子は単なる粗筋を言っているしかし、最初の発言としては状況の確認にはなつた。

・私の方で強調したい所。

「ほうつとためいき」とは、大裕らしい表現だが、父の内面に切り込むてがかりになりそうだ、と思つた。

・大裕の発言の内容をみんなに広げたいという思いで、もう一度問い返している。

・大裕の発言を契機に父の内面に切り込もうと思つたが、子どもは、そんな私の思わくなど関係なしに、自分の読みを出してくる。とりあえずそれは、それで受け止めておく。

・直也の発言をきっかけに、さつき追求しかけたところに戻す。

西津君は、「これならなきやむなあ」って思った。

お父さんは、どうしてこのコスモスの花にぱつと目が行ったんだろうね
そのことちよつと考えてください。洋志、問題わかった？

この他にもいろいろあったでしょうが、お父さんは、コスモスの花に「
ああいいものがあつた。」て思ったのは、なぜでしょう。

政義 お父さんは、ゆみ子に渡すプレゼントは、これが最後や、と
もう、いいのがあつたなと思つて。

T これは最後のプレゼント。で、その最後のプレゼントに「いいなあ」
て。最後のプレゼントにこれはふさわしいと思つた。
なんでだろう。

優子 あの、政義君とよく似ていて、「喜びなんて一つだつてもらえない
さ」と書いてて、最後に、花をその喜びにあげた。

T このコスモスの花ならゆみ子の喜びになるだろう。

哲也 最後やでな、泣かしたくない。

T 最後やで泣かしたくないんやね。だから、あわててもつていくんだ
ね。

勝仁 あんな、ごみすてばに何かないか見にかつたん。

T うん、そこは、みんないいね。ちよつと黒板見てくれる。お父さんが
ぶいといなくなつたのは、「ぶい」というのは、急にやね。それ、なん
でや、て言つたら、ぱつといなくなつたのは、これ（コスモス）を見付け
たんやね。それまで、お父さんは、どうしていたの。泣きだして、この間
（「ぶい」まで）…… ぼんやりしていたの？

由美子 何かないかなつてうろちよろしていた。

T 何か泣きやませるいいものはないかなつて、ここに目が行つたのね。
「ああ、いいものがあつた。」て行つた。

どうしてお父さんはコスモスの花に目が行つたんだろうか、という問題
……これは、そんなに目だつたんですか。公美。ばあつとあざやかにめ
だつていたの？

C めだつていない。

公美 めだつていない。

T めだつていないね。どう書いているかというのと、「プラットホームの
はしつぽ」ですね。「ごみすてばのような所」ですね。どう書いているか
というのと、「わすれられたようにさいている。」ね。

「わすれられたように」てどういうこと。誰からわすれられているの。

C みんな

T みんなつていうのは、……。こつちの方で、ばんざい、ばんざい、な
んてやつてる人は、気が付いているの？（C ううん）そんな人たちは
、わすれちゃつてる。みんなは、そんな所に目なんか行かない。そのコ
スモスの花にお父さんは、ぱつと目が行つた。そして、「ああ、いいも
のがあつた。」て思う。

ここ、むずかしいけど、何でやろうね。

大裕 おにぎりやつたらすぐなくなるけどな、コスモスやつたら、だいぶ
んながもちするさかい、これがいいとおもつた。

直也 ちがうわ。

T じゃ、時間とりますから、もうちよつと考えて。

お父さんは、泣きやませるものなら何でもよかつたのか。それとも、
このコスモスの花が特別にお父さんの心をうつたのか。どつちでしょ
う。もし、コスモスの花がお父さんにとって特別じーんとくるものがあ
つたとしたら、それは、何だろう。……ちよつと考えてみて。

C……（考える間）

・「あつ助かつた」とか、「これで
泣きやむ」という発言の奥にひそむ
内容を引き出そうという思いから出
た問い。

・政義も「いいもの」の内容は具体
的に出していない。それをださせよ
うと、しつこく問い返している。

このあたりは、押しの一手段である。

どうも、同じ所からぬけられないの
で、もう一度子どもに追求してもら
いたい内容を確認している。

このあたりも、「子どもが読みを開
く」というよりも、教師の方から、
読ませようとしている形になつてし
まつている。しかし、もともと、こ
こは子どもたち自身が目を留めてい
ないところなので、何らかの形で子
どもたちに切り込まないと、何も新
しいものが生まれなまま過ぎてし
まいそうだったので、がむしやらに
やつている。

・半分「新しい読みが出なければ、
あきらめよう」という気持ちになつ
ていた。

T ちよつと聞いてみましょう。わからない人は「わからない」でいい。
有香 ゆみ子は、いつも一つだけちよつだい、といっているから、一つだけ咲いていると、何か、お父さんがすぐ目だつて見える。

T 何だつて。いつも一つだけちよつだいと言ってるから？

有香 お父さんがよくその言葉を聞くから、一つだけ咲いているから、お父さんだけに、すぐ目だつて見えた。

T ああ、ここに一つだけぼつんと咲いているのが「一つだけちよつだい」ていうのにびつたりあう。

治武 うんと、……

T わからない？じや智将。

智将 お父さんは、何か行くのがいやで、心が暗くなつてたから、そこにちよつど明るく咲いていたコスモスに目が行つた。

T わかつた？（他の子に）

C もう一回言つて。

智将 お父さんは、行くのがいやで、心が暗くなつていたけど、一つだけ明るく咲いていたから、そこに目が行つた。

T コスモスが明るく咲いている。自分の心と反対にね。

明るく咲いている。そこだけが、ばあつと明るく見えて、目が行つた
宣彦は？

宣彦……

洋志……

T じや、邦臣君。

邦臣 お父さんの心は、暗いけど、コスモスはひとりぼつちやのに、明るくさいている。

T また、すごいこという。コスモスは、ひとりぼつちやのに、明るく咲いている。……どういうことかな。もうちよつと言つてくれる。

コスモスはひとりぼつちでどういうこと。

大裕 「わすれられたように」やさかい。

T ああ、そういうことか。「わすれられたように」みんなから無視されたように、そんな所でぼつんと一人でさいているのに明るくさいている。何か、それが、お父さんには心をうつた。

明るい。ほう、すごいこといいますね。

政義 他のコスモスとちがつて、ひとりぼつちのコスモス。

すみの方でめだたない暗い場所ですれられたように咲いていたコスモスは、ひとりぼつちやのに、なんか、えがおでさいていた。

祐子 わすれられたように一つだけさいていたコスモスは、何か、すぐにおれたりしない、力強いコスモスを。他にさいているコスモスよりも人一倍強い。

T またすごいこといいますね。みんな、祐子の聞いて。「他の所に咲いているのよりも」て言いましたね。ここで咲いているコスモスは、何か他のコスモスとちがつて。

大裕 ごみすてばやで。

祐子 さいていてもすぐおれたりしないし、何か、一人でも力強く育っている。

T わかる、いう人ある？……こういうこと言うてやるのね。祐子は。

こんなごみすてばみたいな、何の肥料もやってないような所でね。花壇じゃないですね。そんな所で、ぼつんとさいていても、何かそこで、一生懸命さいている。

政義 何か、ゆみ子も力強く育つてほしいから、あげたと思う。

C ああ。

・「一つだけ咲いていた」とは書いていないが、そう読んでいるのは、「わすれられたように」をひとりぼつちで、と読んでいるせいかもしれない。しかし、これをどう次の展開に使えるか、この時はわからなかったので、聞き流している。

・智将は、コスモスのイメージを感覚で捉えている。これを行き詰まった展開を突破するきっかけにしようと、繰り返し発言させ、他の子に響かせようとしている。

・宣彦や、洋志は、まだ智将の発言を理解しかねている。やむを得ない気がする。

邦臣が、智将の発言につながる内容を出している。

「ひとりぼつち」という読みが教材のどの言葉から出てきたのか、文章にもどらせる。

この教師の発言はしやべりすぎかもしれない。本当は、もつとみんなで見つくりわかりあつていくほうがよいのだろう。

・やつと子どもたちの読みが開けてきた、という感触が政義あたりから感じられる。

優子 お父さんの暗い心を明るくしてくれたから、ゆみ子の泣いている暗い心も……

T 一人ひとりがすごいことだと思いますね。もういっぺん言って。

優子 お父さんの暗い心も明るくしてくれたかもしれないから、ゆみ子も今泣いている暗い心を明るくしてくれるかもしれない。

T お父さんはこれを見たときに、何かけんげにさいているのをみて、お父さんの心がぼつと明るくなって、「がんばってさいているんだなあ」ってそんなコスモスの花だったら、ゆみ子の心も明るくするんじゃないかって。それ、聞いてて、どう公美。

公美 やっぱりいっしょで、暗い心でもコスモスは明るい心で、それで一本に立っていても、明るく咲いているように見えた。

じゃ。そこで、いっぺん自分の考えを書いてみましょう。今の友達のを聞いて、自分はどう読み取ったか。

このあたりで、一定新たな読みがみんなのものになったと思ったので、各自、自分の読みをまとめてみる時間を取った。

【ノートから】

- ・お父さんは心がまっくらだけど、ゆみ子が泣いているから何かないかなとさがしていたら、一つだのにとでも明るそうなコスモスに目がいったら、きゆうにお父さんの心が明るくなったから、これだったら、ゆみ子の心も明るくなるだろうと思ったから（宣彦）
- ・コスモスがぼつんとさいているけれど、元気だから、ゆみ子もそうなってほしい。（智昭）
- ・ゆみ子もこのコスモスみたいに一人でも力強く生きてほしいとお父さんは思っで見付けたと思う。（治武）
- ・コスモスはすてられたようにさいているのに、かれたりしないでがんばってさいているのを見て、ゆみ子に一人になってもがんばってほしいと思っってお父さんは、コスモスをとった。（由美子）
- ・だあれも気づかない、ひとりぼっちでさいていた。一日だつてくじけたことがない。力強くそだったコスモス。に勇気づけるよう。ゆみ子も一つだけちようだいで、すぐないたりしない力強い子になってほしいねがいがあった。そのコスモスは、他のコスモスより、ひと一ばいきれいだった。（祐子）
- ・コスモスの花は、ひとりぼっちなのに力強く育っているし、お父さんも戦争へ行けば、一人ぼっちになるから、一つしかないコスモスの花を見つけた。一人でも力強く生きてほしい。（明代）
- ・戦争のはげしいころなのに、よくこのコスモスがいきぬいてきたなあと思っ、お父さんの心も明るくなって、ゆみ子の心もたぶんあかるくなると思っったから。（衣利子）
- ・お父さんは、くらい心を明るくしてくれるような花だから、きつとゆみ子を泣きやませて力強い心を持たせてくれる花だと思っったから、ゆみ子にわたしたんだと思っ。（朝子）
- ・こんなくらいところなのに、すぐそだつて生きたなあと思っ。（直也）
- ・きつとくらい気持ちだったから、コスモスが明るく見えた。コスモスは、一人ぼっちでもがんばっているみたい。（美由紀）
- ・このコスモスは、明るく力強い花だから、ゆみ子の心の中で明るくなって、力強く生きてほしいから、ゆみ子にわたした。ゆみ子をはげましてくる。（宏）
- ・一つでもちゃんと自分でいきているから、ゆみ子にも一人でいきててほしい。（龍法）

T 今書いた人。発表してください。衣利子さん。

衣利子 戦争のはげしいころなのに、よくこのコスモスがいきぬいてきたなあ、と思っってお父さんの心が明るくなってゆみ子の心も明るくなると思っったから、ゆみ子に一つだけの花をあげた。

宏 お父さんは、コスモスの花は、明るく力強い花だから、お父さんの心の中があかるくなって、力強く生きてほしいから。

なつ希 ゆみ子はいつともつとんと言っ、その言葉を聞いていたお父さんも悲しくなっ、このコスモスの一つの花に目をつけた。

同じような内容だが、一人ひとりが発言することによって、より明確になるだろうと思っ発表させている。どの子も、コスモスの象徴的なイメージはつかめているように思う。

和樹 戦争だけど、力強くさいていたから、お父さんは目がいったし、いじけず一人ぼっちでも明るく咲いていたから、目がいった。

T ね。そんなところでひっそりと一生懸命にさいている花、ぱあつとあざやかな花じゃないけど。そんなのにお父さんは心をうたれた。

明代 戦争のはげしいころなのに、何もみんなから育ててもらったわけでもないコスモスの花が、一人ぼっちで力ちよく生きているから、ゆみ子にも、一人でも力強く生きてほしいから、一つしかないコスモスをゆみ子にあげて、ゆみ子の心の中をもっと明るくさせたい。

T いいねえ。だれに育ててもらったわけではなく。一人で生きているんだね。

じゃなければ、次にいきましょう。

「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花。大事にするんだよ
う——。」

ゆみ子は、お父さんに花をもらうと、キヤツキヤツと足をばたつかせてよろこびました。

お父さんは、それを見てにっこりわらうと、何も言わずに、汽車にのって行ってしまいました。ゆみ子のにぎっている、一つの花を見つめながら。

はい、こここのところ、どんなふうに読みましたかね。

なつ希 「ゆみく」のところで、お父さんは、一つの喜びをゆみ子に教えてくれるみたいにあげた。

治武 花をもらったゆみ子の心の中は、きつと明るくなっただろうな。

T ああ、キヤツキヤツとやっているときは、きつと明るくなっただろう美由紀 そつと静かに心の中では、「ゆみ子大事にするんだよう」て。

T それは、いつの時？

美由紀 見つめながら

T 「見つめながら」の時ね。

和樹 お父さんは、もう帰ってこないから、さよならの代わりにコスモスのプレゼントをあげようと思った。

T なるほどね。

そうすると、いくつかお父さんの心を感じる言葉がありますね。

まず、なつ希が、「一つだけあげよう」というのは、喜びをあげたいという気持ちがある。それから、キヤツキヤツとばたつかせて喜んでいていうことは、お父さんが渡した喜びが分かって明るくなっているんだろうそれから、何も言わずに、つてのは、

和樹 もうこの家に帰ってこないから、さよならのかわりに。

直也 何も言わずにのところでな、コスモスの花あげてな、コスモスの花でさよならって言ってる。ほんで何もいわんと行った。

治武 お父さんはゆみ子が喜んでくれてうれいけどさよならとか言うところ

悲しいなるでな、何も言わずに行った。

T もう、これ以上何か言うのと、胸がつまる。

優子 何も言わずにのところで、このコスモスは、お父さんのプレゼントだから、お父さんのかわりだから、この花は、お父さんの代わりだから、もう何も言わずに行った。

T はあ、ちよつとちがうね。治武くんは、これ以上何かいうと悲しくなってしまうそう。だからだまってだ。優子は、この花がお父さんの代わりっていうか、伝えたいものがあるから、もう言いたいことはいっ

・ここも、まず、子どもの自由な読みを出させて、そこから、展開を見いだそうというつもり。

ちゃったから、何も言わずに行った。

政義 何も言わずに、のところ、最後のお別れやで、もう言ったら、お母さんとかかなしまはるで、もう終わりになったと思っと思いで出して
T 政義の言うのは、今、いい雰囲気になったから、それをだいじにして
そつと別れたい。

《残された課題》

「何もいわずに」というところの読みが、いくつか出ている。しかしどれも印象てきな
読みに終わっている。文の叙述にそくして、この父の気持ちをもう一步追求してみたい。
（しかし、これは、子どもが課題としてはつきり持っているということではない）
そんな思いで、次の時間の授業を行った。

【授業記録②】

T お父さんが「何も言わずに、汽車に乗って行ってしまった。」

勝仁 そのわけ、わかる。

T みんなに聞いてみましょう。智昭君は、どう読んでる。

智昭 ……

T 悟司

悟司 ……わからへん。

T ほうすると、今日の問題やね。公美

公美 さよなら、と言ったら悲しくなるから。

T 聞こえた？

公美 さよならと言ったら悲しくなるから、何も言わずに行った。

T さよなら、て声にだしたら悲しくなるから、黙って行った。

はい、これ、公美の考え。

和樹 もう、コスモスの花をさよならの代わりにあげたから、だから、
だまって行った。

T コスモスの花をあげたから、もう何もいうことはない。

宏 「にっこり」のところ。

美由紀 さよなら、というと、もう帰って来られなくて、もう、ずっと死
んでしまつて会えなくなるから、さよならつていわない。

宏 あの、「にっこりわらうと」のところ、今までは、ゆみ子の笑顔を
あまり見ていなかったけど、花をもらったゆみ子の笑顔を、うれし
かった。

宏は、「にっこり」を念頭において
発言している。

T ゆみ子の笑顔がうれしくて、もう何もいうことがない。こういう意見
ね。

勝仁 あんな、コスモスの花あげやつたで、もうええと思つてすぐいかつ
たん。

T もうこれでいい。

はい、由美子

由美子 お父さんは、ゆみ子がキヤツキヤツと笑っている姿を見て、ほつ
として、また、お父さんが何か言つてなくといやだから、何も言わずに
言つた。

T せつかく泣きやんだんだから、そつとこのまま別れよう。

政義 また、もう一本とか言つたら、またお父さんは悲しくなる。

T なきやんだのをさいわい、せつかくなきやんだのをまたつぶしちやつ
たらいやだ。

大裕 キヤツキヤツと喜んでやるときに、今のうちに行つたら、ゆみ子が

・この時間に追求したいことは、は
つきりしているので、さつとその問
題に入る。

もうほんなにいいやらへん。

哲也 あゆみ子がわらってるのを見ながら汽車に乗ってる。

T 笑顔で満足した？もう、キャッキヤツと笑ってるのを

哲也 笑ってるのを見ながら汽車に乗った。

T 見ながらね。だから、その時、お父さんの気持ちは、「ああ、これで

よかった」っていう気持ち。それともこのままそつと、こわごわ？

今3つ意見が出ていますね。こういう意見ですよ。

今、泣いていたのが、喜んでくれた。ああよかった。このままの気持ちで、そつと別れよう、という人がいますね。

それから、ここで、さよなら、と言ったら、自分の悲しみがばつとこみあげてつらくなるから、だまつて行った。

3つめは、何かお父さん、すつきり、ここである満足、もう何もいうことはない、という感じで行ったという人がありますね。

C ぼくは、3番

T 智昭君はどれにちかい？

智昭……

T まだわからない。洋志は

洋志……

T まだはつきりしない。宣彦は、

宣彦 2

T どういうこと。言っごらん。ぼくは、こう思うとか。

宣彦 さよならとか言ったら、何か、悲しみがどんどん増えてきて、

優子 コスモスの花をあげたからじゃなくって、コスモスの花にいつぱい

いいことがつまっているから、そのこと（聞こえない）

T 何か大事なこと言いましたね。ただ、コスモスの花あげたんじゃなくって？

優子 お父さんの言葉は、このコスモスにつまっていたから、もう何も言わなくて行った。

T 今のわかるっていう人。つらいとかじゃなくって。……

今、優子が言ってること

・今まで出た発言を整理してみる。

1や2は、どの子も納得できるだろう。しかし、3は、今の段階では、まだ、みんなの納得を得るところまで語りきれしていない。だから、できるだけ、3を中心に深めたいという思いがあった。

宣彦の考えも、もっと具体的にしていくべきだったかもしれないが、3を深めたいという思いが、優子の発言を積極的に取り上げる形になっている。